

本文は「獨斷的な餘りに獨斷的な」の連載の中断を再開する約束が果たせぬ事情により、再び「暫く休載の辯」として書かれた一文である。

「獨斷的な餘りに獨斷的な」の主題である「近代化とは何か」に関して、問題を事毎に演劇に収斂させるか、考察した一文である。

現代演劇協會の理事長としての物忙を極める日常の中で書かれたこの文章は、第一節末尾で述べてある様に「近代化は藝術から娛樂を放逐した。その間の精神の政治學を究明する事こそ最も文藝的課題」とどうもまさに恒存でなければ論じられない、独創的で大層興味深い視点から、日本人にとって近代化とは何かを論じてみる。

言ひたことも次から次へと提出してゐて、各節の前後の関連のとうへにくい感心するが、この展開の連さ、転換の速さを感心させる文体にこそ恒存の言ふ、作者と息遣ひを共にするリズムの快感がある。だ、第八節と第十二節にかけての緊迫感には、何度讀んでも興味深く、まさに「醒めて踊れ」の表題にふさわしい内容だ。

へ各節の要点について

(1) 日本の近代化及び日本文学の近代化の過程において、藝術から娛樂が放逐された。

なぜこのような状況がはじたのか、その間の精神の政治學を究明する事こそが、最も文藝的課題である。

(2) 後進国の近代化とは西洋化に他ならない、といふ恒なる持論

(3)

昭和三十一年頃から、近代化における日本独自の「美能」
更に世界共通の「必要悪」としての近代化の「美能」のみならず、
その本質・定義に関して強い関心を持つに至った。

・社会学者達の近代化の定義からは、

近代化とは現象に対する主體側の精神・政治学と
しての近代化の問題の抽象化してしまふ。

・和達も近代化の過程の中に在り 行方全くわからぬ
ものである以上 定義は出来ぬ

←
近代化の過程で生じた言葉はすべて so called =
いはゆる何々といふだけの事に過ぎない

(4)

言葉とその話手との間の距離といふこと

話手の意識度が高い ↓ 距離大

「いはゆる何々」の意識を持たずに用ゐてゐる人か
あまりにも多い ↓ 距離小

(5)

「河童」を上演して確認した事

←

現代の日本人は自由・独裁・平和・戦争とか
その種の言葉で遊ぶ能力・餘裕に著しく欠ける。

言葉を自分から遠く離す

←

その言葉を精神化し支配操作する事から下する
言葉と物そのものから離し、自分の所有にできる

論戦劇で笑へぬ観客

このかしの教かぬ無知

(6)

近代化の必要条件とは、

「ハードウェア」の近代化に對知する 精神・政治学
の「ソフトウェア」の適応能力に在る。

近代化とは

技術や社会制度（いわゆるハードウェア）

メカニゼイション（機械化）

インフラマライゼイション（組織化）

コンファーマライゼイション（画一化）

ラショナルイゼイション（合理化）してゆくこと

そして、こうした状況に対処する 精神の政治学

確立が求められる（ソフトウェアの適応能力）

マルクスの言う 疎外に 対応するには

「三要素の用法にすべてが懸つてゐる」

自分と言葉との 距離が 測定できぬ人間は近代人ではない

いや、人間ではない

意識度と肉體・音聲によつて示さねばならぬものが
それか身につく土壤が日本に欠けてゐる

この土壤に生じた文学・藝術・学問・政治や制度が
もし近代的に見えるとすれば、それは何處か
どこかしらあるに違ひ無い

(7)

アメリカ南部の小驛での 母・娘の別れ方

日本の月と送りの場面

この 彼我の差は何處から来るのか

(8)

明治以来、自由と個性の確立を求め、様式・儀式
作法を 徐々に捨て去つて来た我々は、皮肉なことに
卻つて自由を失ひ、個性を失つた

しかし、自由は規律やルールという枠があつて成立すると
諒いても片附くことにはない

近代化とは 様式を成り立たしめる 甚般にたる リージョナリス
ム（地域主義）に對して 破壊的作用を意味する

リージョナリスムは場の原理の上に成立する
← 家族的な共同体の意識の一つの場を形成する
日本の近代化はリージョナリスムからの脱却を
ついに果し得ず、今日に至つてゐる

日常生活における場の原理

場には忠実であらねば、個人としての相手方に忠実でなくとも済む
相互間に共通の場が成立しないと不安

←
個人たるものは存在しない

(9) 自らの手で実に鮮やかに場の転換を計る

→ 西洋のアングロサクソンの精神構造を確認
リチャード・バートン 演ずるハムレットを観る

←
高激な感情の変化を展開するその根柢に
一貫した性格・人格が成立する

(10) 劇団日即の公演と「場の転換」の実践について

(11) 「精神の政治学としての近代化」とは

言葉と話し手の間に距離を保ち、その距離を
絶え間なく変換させねばならぬと同様に

相手と共に進み上げた場と自分との間にも距離を保ち、
その距離を絶えず変換させ得る能力が
なければならぬ

日本人の場合には、場には心身共に縛られてしまふからで、
その場の支配から、容易に脱却できない

(12) 場を構成しなからず、或は場によって自己も変貌させなからず
しかも一貫した人格を保ち続けるためには

場と自己とを冷静に眺め得る目を持つたわけにならぬ
自己を隠し隠ける場所を持つたわけにならぬ

近代化に対処し得る精神の近代化に心をを用ゐるゝといけるゝのだ

(13) 時間藝術としての小説や演劇

先づ言葉そのものと経験させてくれるもの
作者と息遣ひを共にするリスムの快感になければならぬ

讀後感

明治維新以来、欧米を手本として近代化を押し進めて来た。我々だが、外装は、先進國と称せられるまでに成功した。経済的に豊かになれたのだから、言ふことはないか。恒存言はく、戦後の日本人は、つひに、本氣といふものを失つてしまつた。

論壇でも、ジャーナリズムの場でも、今日の議論には、事欠きはせず、とすると、問題山積、一國の士、正義派の諸氏にとつては、問題解決への処方箋を、書くのに忙しうである。けれども、恒存の提起し続けた精神面での近代化はいかにしたう可能か、といふ問題に、なぜ、かくも無関心なのか、我々は、結局のところ、外装と経済的豊かさの部分では、生きられるからである。

では、恒存の言ふ、本氣とは何か。
「まともに生きよう」といふ自覺的な精神に裏付けられた「生き方」を、欲する切實な思いひである。
言葉の用法により、自己と言葉との距離を保ち、場と自己との距離を保ち、また絶えず変化させ得る能力を、持つ。時間藝術としての小説や演劇を、成立させ得るもの。言葉の用法にかかつてゐる。この様ち、主張に、まともに耳を傾ける知識人が、少く過ぎる。我々は、今日も、政治と文藝との二元論の、血肉化をみてゐる。いふことが、うぬい。